

泣いて

笑って

訪問看護
奮闘記

今日もゆく

京都や大津で在宅医療をサポートする訪問看護師の手記を集めた「訪問看護の泣き笑い」あなたのお宅へ今日もゆく」が近く出版される。容体急変を察知したり、患者の看取りに立ち会ったりと、たくさんのエピソードを盛り込んだ。時には不満をぶつけられながらも、利用者の「ありがとう」の言葉に励まされ奮闘する姿が描かれている。

「洛和会ヘルスケアシステム 介護支援部 介護事業部」(京都市山科区)が13カ所の訪問看護ステーションのスタッフ50人から原稿を募って編集した。訪問看護師は医師の指示のもと、ケアマネジャーやヘルパーらと連携し、健康状態の観察や医療的ケア、日常生活のケアにあたる。

洛和会スタッフ
50人の手記本に



「訪問看護師は利用者から教えてもらったことが多く」と話す洛和会ヘルスケアシステムの山口紀代(きよ)さん(京都市山科区)

やりがいも厳しさも率直に

訪問看護師Hさんは、末期がんで一人暮らしの男性を担当、「最後まで自分らしく、自分のために過ごしたい」という望みを支えた。男性は容体が悪化して亡くなったが、Hさんは「もっとできることはなかったか」と自問しつつ「人が人を支えることを実感した」と書いた。

Tさんは、脊髄小脳変性症の20歳代の女性の母親から同じ年ごろの看護師がいいと請われて担当に。手足の緊張をほぐすためにアロマオイルのマッサージやリラクゼーション目的のネイルケアを施した。「少しでも希望を支援していくことで在宅療法に楽しみが持てたら」という。

訪問看護師は緊急事態に直面することも多い。Kさんはいつも訪問宅で呼びかけても玄関に出てこないのを不審に思った。洗濯物も干しっぱなしのようだった。「何かあったに違いない!」。119番通報で駆けつけた隊員が窓ガラスを割って侵入し、倒れている住人の男性を発見、一

表紙のイラストや挿し絵もスタッフの一人が手書きした「訪問看護の泣き笑い」

命を取り留めた。反省やしんどさも率直につづられている。段取りを焦る余りに患者を悲しい表情にさせてしまった、家族から「状態が悪くなったら、おまえらのせいや」と言われた。一方で「看護師さんが来てくれると安心」「ありがとう」の言葉が励みになると、多くの訪問看護師が触れている。誕生日に、担当する難病の患者にハートモニカで「ハッピーバースデー」を吹いてもらった看護師は「思わぬプレゼントに驚きながらも感動した」と喜ぶ。

編集にあたった訪問看護ステーション統括の山口紀代(きよ)課長(54)は「しんどさの中でやりがいを感ぜられる訪問看護の魅力を伝えたい」と話す。「訪問看護の泣き笑い」は出版文化社刊、206頁、1280円。20日発売予定。問い合わせや注文は同社(担当村山さん) ☎06(4704)4700。(日下田貴政)